



Title	博覧会会場計画と都市計画について
Author(s)	神吉, 定
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53306">https://doi.org/10.18910/53306</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 博覧会会場計画と都市計画について

神吉 定

本発表は、1992年スペイン・セビリアで開催された、セビリア万国博覧会所見を題材として、今後の博覧会会場計画の事後利用に対しても機会性の重要さを述べることを目的としたものである。

1992年セビリア万国博覧会は、'92年4月20日より10月12日までを会期に、コロンブスの新大陸発見500年を記念し「発見の時代」をメインテーマに掲げ、今世紀最大かつ最後の万国博覧会としての記録をとどめた。

会場計画に当たっては、当初世界13社の設計事務所を選び、指名による会場計画案コンペが行われた。最終審査にのこった2案が1位とされ、豊かな湖水をとり入れ、水上にパビリオンを建てるエミリオ・アンバーツ案と、会場の後利用に有利な実利性の高い案が選出された。後にアンバーツ案は、外国館の参加がふえつづける時点で、物理的に面積不足を理由として不採択の方向をたどったようである。後地計画は「カルトーハ'93」と呼ばれる新都市計画で来世紀に向けて稼働する学術ビジネス都市の建設である。博覧会の会場計画は、この新都市の計画をベースにつくられ、新都市のためのインフラが、博覧会に利用された効率本位のハード先行形の進行経過がある。現在会場は過去に開催してきた多くの万国博覧会を越えて、斬新且つ優美であり、来世紀を透視するような望ましい出来栄えとは言い難いものとなった。望ましい思考を許されるならば、事後に都市計画を予定

した博覧会会場計画でなく、理想的な博覧会会場計画を探索する、言わば逆順のパラダイム的発想をこそ実施すべきであった。「発見の時代」のテーマは博覧会を越えて、後に続く新都市プロジェクトのテーマとしても引き継がれるべきであった。

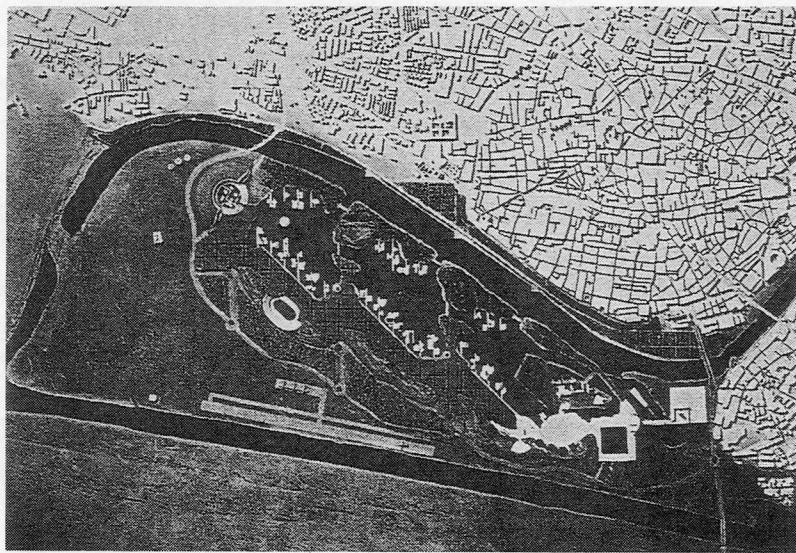
この点セビリアは、博覧会でなければ生まれることのない飛躍した発想を、魅力的な都市づくりに反映されることのできる絶好の機会を逸してしまった。今後つくられる新都市は、終了した博覧会会場をいかに魅力的に「再生」するかと言う課題しか残されていないのである。

今後のアーバニゼーションは、従来形の都市のアカデミズムをうち破り、機能性、利便性、合理性、快適性の追及に終始することなく、柔らかな都市への指向こそ求められているのではないか。

エミリオ・アンバーツ案の楽しさは、陸上と水上の日常的用途を逆転させたところに始まるのである。建築物はすべて水上につくられる。陸上には一切の建築物を排除しようとするパラダイム的発想をグランドポリシーに計画をスタートさせようとする。

新しい博覧会がつくられるのであれば、全く新しい環境創造がなされなければならない。「博覧会とは何か?」という基本事項の徹底した掘り下げを、成しつくすことによって到達できる結論と方法論の純粋な一案が、多くの課題をひとつの答として凝縮させた提示となる。

今や博覧会という形式の一過性催事への



コンペ1位で不採用となったエミリオ・アンバーツ案

観点は、方法論的手づくりの打開であり、非日常的から、日常性になり下がって魅力を失ってしまった手段を、何としても修復するのではなく、アンバーツ案のように、全く新しい答を実施してみせることなのであろう。

'92セビリア万国博覧会会場は、在来型都市計画そのものであった。意識的にと感じるほどにウォーターフロント利用に背をむけた会場、単なる夜のイベントスペース

としての“湖”真面目一方、遊び心の湧かない教条的博覧会。ユークリッド形直線主義の動線計画（不動産屋的宅地造成に近い）。フランスの首都パリ市を例にとるまでもなく、博覧会の開催によって、都市のシンボルゾーンが形成され、それが継続的に世界の人々に認知をされつづける効果は大きい。

かんき・さだむ  
社団法人 日本ディスプレイデザイン協会 参与  
1992.11 第34回大会